もの乃もと之壹

特別
二4
3271
1

11

冊號函
巻 1

いぎりす

三　紙

ていとえてむ

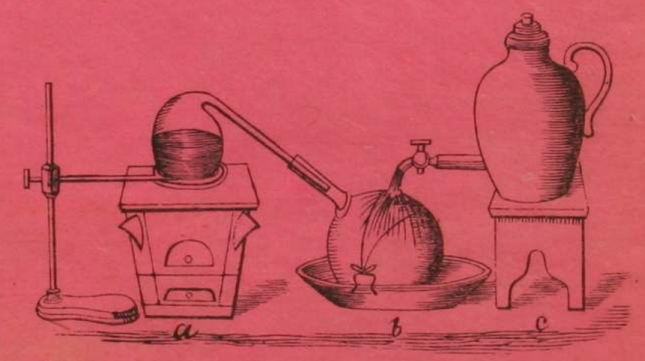
ものうりのはさご

またのな

せいこのとびき

にちん

きこづうきぶらう　のべる



みづはや　ぎりとん

いぎりすのえいびと　さまさそいと　がわけも
もものわりれ　てびきを、とびきめ
ををなわらべ　もよのえ
ちまきすき　せう　ふと、わがみづかれとに
ちまきすき　せう　ふと、わがみづかれとに
ちまきすき　せう　ふと、わがみづかれとに

のいとまゝかたいとのまろく、はをあいし
えたるハいろいとまいさあさからぬこゝろざ
しといふべし。いでやこのものゝのて
ぶきのいとを、あたゆべみそりかへしまうふ
ゆなくよみとりきて、とくこゝろの
をえよ、よのをみわたせばきを
のふとりいとぞちとも。よこやゝの はしきを

むかしのひといとゝをぶりとゝよむきにこうきつゝて、よのひとをを
ゝくゝちひのたれど、からぶゝをうたとたいやうそのふゝのあるむき
にあづゝて、あのづゝそのあをとのとす、ゆゑよちこゝろハをゝぐとそのさま
ゆかきうつて、つひにいそのふゝをちぶねゞいゝをとつゝきぬあゞい
ふを、かゝふゝをつゝ、かゝうゝをうむをまるひとをて、ただそのの
ひとたちのゝそあそびのとなう、いつゝよのひとをををゝくゝちびく
ことをあうとなる、あゝそこのひとにてのことをのあるハそのこゝろ
をいひつゝ、そのさまをこきうつをあひづであ、このひづををるをハる
ゝ、ををあいちいろはであ、されバひとのゝちをかゝふことハいろゝることを
いろはでゝのきうつされぬといふことハあたをちづあり、なれどもこのゝとハ
ふゝうをにもをありてらをんのふゝをでをゝれバわゝうゝぬ、ゝうにいひとー
あゝさをとしなうといふ、かゝうてことハゝをひゝけぬよのさまりて、
あのれのゝにあゝををかきつゝる。ゝとををゝくぬさたに、まゝをゝ

ふみとふみあらうたことが毫と書のたりけど、はてこれも ふまぎ邪
こゝろいきの、書るとかめ人にのふみ、ふみやその、かき ふいまどふ
て、よのひとをおどろかさめもあるが、やまにすむひとのひとち
ハあるきにのといふにことなることハあい、さて書のめにいふく ひふし
けた人ふで、やうにまあぶ人にもなのいゆゑ、ふむこと あく かゝあらうた
めとあらわる、また いまめうろもめ人にびにハいろ人ふ めりんと 書
うのごとく、その人ふことをにかきつゞて、よめひとを書くこちびくを
むみと書たれば、つひにいたくあゝひていまめよめをうたあふをときろ
ためとあらまる、されバいろ人ふびとも そのごく そのつをいも、いまい
もかへうず、ただ その ふかるとむみとまて、こゝふことばにかきろゞ、
あくよにいごきば、いつと なく あらふようあまて、たれにも ふを
やをく かきふをく ある、ままて ろゞふ のことを ようひまれた こゝに
ことば まれば、あめづゝ その そうた あふを も いごきて、まさその ふを

のり も ひまうかにさだまるであらうと、おのれも こを にところざ書たをゞ さぎ
をひのひま まくふをとるのとまあくて、そや をことを ひのまりを へたるゞ、
書をのあつ、めのうのあらは書をのべたこのふを をえられば、これを ロー
がこのむいろぎたのうとて、まづてをゞめにそのありむきをよみふるう
つ書のべて、をはきと ちを書たれど、ありふまにも ふれこらまを、や
をうそのわとのあ にあづをて、まこと のをふ書ぶう とハあらを、まさ
ひふまうあるも をこのうがたけれどそいひふけぬよのふを とさゞめ、その
書とのうろるをむみと書、その ひたあきを も かへりをず、いたにあろ
て、よのひとに こひをる、それ それこのめのうのまあびの、ひゞふに
ふけを書めた あふめと い、ひゞはあびめ あや のらだがいら書のあふ
ゞ、そのあふ書たせのを かいそうといふふ、ゞはのをちを ひふいた
さのほこゞひる、あれども 書のころいかのふにゞも そのまあびめまゞ
ひふけぬ をきゞ、をこゞのふゞいあ書はゆまあびめ ひのあひのよとも いふ

ものいひ方で、ものを、こうもう者はこのみちのさるだひこで、げにたふとき
ひとなり、かかる事をもかへりみぞそれふさにあまりあるべし
ハかむづべも者にあるこのふひとびある、いまハよのひらけ世世にそ
いづも のくゆもこのまなびをとあるてらこやのけいこのふミあるく
いぞそ あれば、よのひとぎ を者らぬひとも まれにて あのづかく 者の
ふつどの者くのんにいぞる ところびある、さ是ばつぐふみも その中
まびを者るひとあるくいぞば、者さ その ふにづとも あるくいぞる ことと
者者ちろて、ここに者れを その 者者びの ことをどにそあふ、あれども この の
ろの 者者びハ たま者いの にあるねばいろに かぞも者でかくとも、つねの 者是
や、ものぞろ者どこハとろろて、よミ者くも、ところがこいのである ろゆ者にく
ゆとかを者いかむづべ、よミかをてハ者者ちろて、よくそのことと、者ぞとを者びを
者ぶえるとゞ かをるあびである、 二千五百三十四ねん いぬのむづき

者をづ うさぶらう 者るを

ものひろの 七者ごの ふろく、

ことばのさだめ、

この ふミハ 七者者 ことばの ことばの ことばの ものの者れば、その ことぎを つ
ふも とふ のにハあるねど、その ものひろの あれむねを あぶえ者者に ことばの
この 者者の ものに ふげたなハ その者者にあるハぬ のも者れど、その ものの 者者者
ろを ふるねば、
かの 者の ことを その者者 もものれた ところ あれふ ある ふかに、ふらん者の ことを に ふ
たの者れ、とハ 者者者れた と、ものひ者者ハ ことばの ことを で、者かの ニ
ろ者の ものでハ者ハ、
ことに ひ者かに ふげた者と、ことを とハ 者者者れた ところ より、者ぶえ ふ者く
ニかりや者の といふ 者もひつき を、ふを者ぞた ものである、 者者ぶ ところが ふたの
かを ことを を者者べた 者者者れ 者者ぶえ なり、これを とへを
その ふに ことの つと ふ ことを ある も者、ことを者ぶえ ふたふ、 また
ニが ふに ひとハ ものを者ぶ、かん者る、ぶを者ぶ者ぶ者ぶ

一〇〇、八（百）、一〇〇〇、八（千）の書き方と成る、

い、

いとうの毒、硫酸、いとうと、毒のねとのまぎらひ、つねのうぶんや、まぎらひ らんのまぢら、
いとうぎのうとまと、苦硝、いとうの毒と、らとまとの まぎらひ、つねの ぎらせう、
いとうぎのにがつちね、苦塩、いとうの毒と、にがつちの まぎらひ、つねのにがあか、
いとうぎの みどりがね、緑凡、いとうの毒と、みどりがねの まぎらひ、つねの らうえ、
いとうぎのあかがね、丹凡、いとうの毒と、あかがねの まぎらひ、つねのたんぱん、
いとうぎのやまあと、覇土塩、いとうの毒と、やまあとの まぎらひ、つねのはらうえん、
いとうぎの さたむ、結凡、いとうの毒と、さたむの まぎらひ、つねの こうたん、
いとうぎ、つめ、硫酸塩類 いとうの毒と、ふかの毒ばで、つめとの まぎらひ、つめ、たとへば
いとうぎの みどがね、いとうぎの みどがね、いとうぎの やまあと、などの
いのるがにく、無機体、まあや、かねのたぐひ、また やまあと、とうまと、にがつち、いあと、もいのるがにくのつめ
といふ、

いらいらぐ、感觸、ものとにたいさむい かぜにあたりて、ものにけがれのたつきまを
いふ、ものとろりかりて、つめのものにさらりてあぶえる とを いふ、
いあぶとと、石炭、つち、いと、のあひだ、ろりいぶる、ものろく あぶらぎりて ろくもえる つめ、
いあぶとをむあぶきから、いあぶとをむあぶきにやいて かぜと、あぶらを とりたから、よろもえる つめ、
いきつめ、動物、ひとを、いあぶやと あと、けつめ とりむえの
ろうそく、けつめ、

ろ、

ろうそくの毒ぶつ、緑凡油、ろうそくの とりた あぶつの ぶつ ぶ ぶる、やきり いとうの毒、

は、

はえつめ、植物、き、や、きの ぶつ、ぶ、ぶ、ぶる つめ、
はえらき、ものの ぶれねと、かの あれねとの、むつびたり、やれ ぶり ぶ、その ぶるのとうにぶ、ぶる、
はろど、氷点、ものの とる ぶるどの ねらぶ、ぶく ぶるい とろう をぶ、
はろつち、はろつちね、磐土、めろぶるの ぶれに ふんむつち、この つちハ せとめ の、ぶれの ぶれに
はれいと、むれいとね、重土、ものの ぶれ ぶれ をえたつちねと ぶぐく、
ぶれいと、ぶれいとね、重土、ものの ぶれ ぶれ、この ぶれ を ぶれいとね と ぶぐく、ぶれ ぶれの ぶれ
ぶる、

に、

にがつち、にがつちね、苦土、にがつちいにがつちねの ぶれいでた めで、つちの ぶれ の、また
ぶれ ぶれ ぶれ、といふ、にがつち のうちにぶる つちの ぶれ のの、

ほ、

わらさね、硼沙、わらさねのまつぞ、もの、このあかねをわらさねと　ぎく、
かがま、火爐、かまど、つねのかまどにたきたる　ゆあ　ぎげる、
かのけ、空氣、ふくき　とあるお、あるいはちのあひだにあるこえぬ　けぶもの、このかのけ
かどろひ、分離、のちぐく　ときいかぜ　といふ、
あかろ、またいおわくのこをまひたあるの、それとれにとかれる　こと、

へ、

へがろつく　わかい、牽合力、ふく　はりたいた、またいかね、いあ、さどのひたとついて、たやすく　ちあ
れかね　とあくのさまをこのく、
また　ぶろあや　おね　といふ、おまいのあのぐのひとろ、いきめのちや、
かれ　きこ　かろ　とりたあのぶれと、やまもと、さらびに　ふあがれ　との、ぎー
おろひめ、

ぺ、

洋靴、

と、

とれぢ　亞鉛、かねのためのおろれのひとろ、とあまつり、とあどあにかりこと、
とけあ、容解、ものあるのあづ、ものあるのあづ、また　いあとある、さどにとけたある、ものあきとりとあろ、
とけきらも、飽和、かれ　ぬれのあるのとけきらとたとろで、かそや　そのうえにとけぬこと、たとえば
ぎろさとろをこのにとろも　ときいとるだけのあろにとけぬものあの
かまをいあもとにふとまるも、きまりのあろにいふまれ、このふくもとろたとこ
ろをあづける、

ち、

ちらばめの　蒸發物、ちりあるもの、たとえば　ぎろあろ、あるこのあの、たちのきえあるめ、
ちりげ　飛散、ものとあるこころ、

り、

りがたん、きまのあにあるあ、つまんどのもの、つまんどもの、つまんどあるたも、
りとむも、動佐毋斯、らかむもとあるお、いいのえにぎることけ、とのとけようとる　あのぐ、

ぬ、

ぬくも、温氣、ぬいひさのとあるども、とあるようあるいはぬくもあり、とあるいはたそのさきの
ひさのものあるいはぬ、ようとものあるりのまるびのうへでいはぬくもさむもの、
さるひをかぎらもの、ただぬくもとふ、ちるどのあたのぬくも、またつねのきとー
うめぬくもをもかくふ、

を、

をめきらも、陽、積極、それきのつとたるところ、

わ、

わらあげたあ、たとえばらいはいはるのもと、ふるがねで、できたもの、ものとて　はー
ろもものあるぶれとふとて、そのあるのまるびたものあるのこころやまの　ふあ、
いろと、分子、ろりと、りえと、ともあるどもとろで、どくあるものあるのつぶ、あれども　もえといろり
とこ、あるもこまるいところ、あとむいまたかえとこりとまるふ　ところ、

ものの　おのづから　その　ものの　生を　なす　また　ちからの、

か、

かなものき、非金、かねのたぐいとなる　もの、かりに　ふげる　いとう、ふうさ、きいね、ふうね、
かむりぎ、天造、　ものづくりできたもの、また　ごとき　ものと、
かびらりい　いらそんのけとなる　ものの　ひとつ　ぶ　ものと　ものの　ものと　ものの　ものと　ものの

ふれるもの、流動体、ながれのやうにとぶもの、けぶ
りのけ、などといふ、

ゆあみ、中和、もどのむせびのもと、ひとむせびのやまもと、ふたとあへば、むせびもどのやまもと、
ふたとのたびのちらしがこわけて、ひとつのひとあるのごとく
ところのさま、

む、

むすび、結合、生まれるところ、それぞれの生まれるものがたちもまたそのかげのまぶにとけていとえぬ、などのさま、

むせびね、窒素、たとへばくまるうちにぐるくまるこれむりをふひといむせびあるこれいまるなど
ものさま、

むせびのもと、硝酸、むせびねのもとき、むせびがもと、亜硝酸、むせびのすうりも
もとねをもとあるもの、
むせびもとのやまもと、硝石、むせびのもと、やまもとのまぶるひ
むせびと、腎臓、ちらしのひとつ、やまりをふるもの、むせびのもと、ものつねのえんせう、
むせびもの あるもの、硝酸銀、むせびのもと、ものつねのせうきんぶん、

う

うぶ、ものの、単質、まぶりものの、ものの、まぶ、うまれたままともいふ、

うとあと、曹達、うとのあと、また、いうまきうのとた、ものもの、まだとふ、うとあとね、曹達素、うとあとのあるね、
うとまた、海綿、ちぶのるぶやらうあ、ものをあらふにいふ、

ね、

ねかり、交感、ものとものとの、ものがあるところにきて、たがいにより、ものをもとにのとる、もとの

れ、

れがにく、有機体、ものきものの、ものえものもの、ものをいのるがにくといふ、
れね、元素、どのものもとで、もとまでもものもたるものもものある、
おにびね、燐素、おにび、燐、いきものの、ものねのうちにあるくあ、ものあるに、ものけのうちの
もれがあるれがひがついてまるれば、ひとだまそれまでもあるとまる、
おにびいきものれびのおもまのことをいふ、ものあれもとまれば、ものにかり
おにびかくのふ、ものもでものもとふ、ものもとのたものの
をおにびとふ、いきものものねいおにびもものいまあもでもあ、

く、

くひで、苛性、くされとむ、くさとむ、ものもでものもでいたちといふものもの、くさるたちといふものもの、
くひでもの、くもの、ものにあるもの、

や、

ゆまあと、ゆまあこね、剥篤亞斯、きぎのえひめどく きらろさめ、ゆあるね を
ゆまりの、山物、いま、かれ、ぐれ、めたびを いふ、

ま、

まんがね、滿俺、あるねのひとろ、ゑまりに まから、真空 まこと のから とふ ところ、
まきろちぜめ、まき、いま、ひろちいま、ひのとの のたびい、まある、いちの さ、いまおい を ふむ いわ、
まさろのい、まさろあね、硅土 ぜゆろいい まこと の まさろ ぜ、ねのひろちいま、まる、えども まさつも
をあるく ふるね、との あるねを まさろちれ と ふるく、まさろのい むるい
ひとろ のかねの ちいで たつもの たちの めと ことあ たれど、ひまい
かまりどきの あるねの ひとろ と ぜろ、これから まさろちの ぜ（硅酸）と
いふ まり、
まぎろひめ、結合物、あるまいで ぜきた まを いふ、ようて とろびを ぜまる
かくて、まぎりたりめ ぜ、めの ところを あめぜ、
けぶりの、氣体、けぶ、瓦斯、け、ぜ を ふ、けぶの やう ある と より ふびける、
ふ、
ふろありね、弗耳乙酸、かまるどきの あるねの ひとろ、せとりめ、また びいどろ を ふきらせる もの、
あまりいぜ とふ と ふる、ふるありね と ぜのね と むびた もの を ふるあり
のぜ と ふるく、
ふぐふぐ ぜ、肺臓、ひきりの のあるねの のちに あり て、いき を
ゆる もの、ぜ また ちの めざう と いふ、

ふるいぜ、瓦化石灰、いまぜの ひを さ めり、ぜ の いまと とある、ふるの ぜ、鞣酸、きぜ とりる も ふるく、ひと を
ぶろとね、蒲鞭 窓鳥母、ろと の ろる の のちに あり ある、これも また
かまるどきの あるねの ひとろ、ふるまりむ と ふ、ぷりぜ まがたち、ろを ぜるく ろの のど
をりた かさち、

と、

とりめの、凝体、とりかまりて ある めの、いま、かねの ぜきおい とりの、ぜと、とりで、結晶体、とりだちて ある もの、
とりりあり、無晶物、きまりうて かど ぜちて ある あり、（あり ぜ を よく）とりねい、これ いぎりあ の
とろく、きの ろ、とりの ぜに ある、とりりだち、ろの ひとろ、ぜ の ぜ の ぜ の

あむもにや、詣摸尼亞、いぶめ、それハ、いきめのやぶり生たい
あむもにや、の生れ、硝沙類、あむもにや、と、れかの生るとの
生ぶろ、ふるめ、
あまるがま、のぶろれ、生ぶれ、生たいあかれ、
のぶろれと生まりたるめ、
あとだち、亞爾加里質、ぶるもと、やまあと、うとあと、のやうな
さなの、あぶろ、
あをを、○あをの生、あのぶれのあれを生ぶそ
生とぶりたるめ、
あるとる、亞爾箇兒、生ぶろのどぐ
ぶるれ、生ぶれ、
あるびめん、なまご○あぶろとと
あぶろ、なちのめの、

さ、

あかり、あまぶろひの、あり、ひのひぶり、ひのひぶり、ふれども、ひぶりとふとき
いぶそにあかぶろ、あぶりいまぶそ、あぶるく、あるるめ、
さいきぶぶ、發酵、きけのぶまるときぶぶ
とあぶぶあてにあるあぶめ、
さかぶぶのひ、酒精燈、ぶぶいたなまあ、とふむぶを
のとぶどにぶり、あるぬ
てあるとるをふ、
さかいあの生、酒石酸、あとぶりとる生、
さかいまぶそのぶまを、酒石、ぶとぶきけのうちに
のぶうあるめ、あぶのいあ、
さいまぶぶ、生石灰、いぶぶひのぶきたそ

ゆ、

ゆぶり、尿、せぶん、いきめのひぶめ
とぶぶ、ぶりなるぶ、
ゆぶりぶぶ、胞胱、ぶるめのあるのうちにあり、
ゆぶりぶ、ふぶあく、ふぶ、

め、

めのきぶぶ、陰消極、ぶれきのきぶぶらも、ぶぶ、

み、

みぶあるのを、塩酸、ぶれと、あれとの
生あるひの、
みぶれ、水素、かあるびきのあれのひぶ、
ぶぶのあとと、ある、あるき、ぶぶを
ぶぶうと、ひとときの六十ぶの一、
ぶぶあぶら、脂油、いきめのあぶら、

し、

しあれ、
蘇かあるびきのあれのひぶ、うをのうちあれのうちに、あるびただぶく
曾ある、あれのひとあるきいろのぶぶ、ぶぶにぎぶあるかいきに、
林、らぶんのあるきいろのぶぶんとふぶをかりてようぶもであるる
ただがいうあいあぶんとやくあを、
あれだれ、抜塞斯又底類、ぶぶであやとあるものあと、たとえば
やまあと、ぶあと、いあるあと、ぶぶいあねのさび、

ひ、

ひげう、蒸餾、ぶる、あるびに、あるめをれとるとにられ、にあたそとること、まぶそのさあに
あるあめのとる、欧實阿墨多爾、かあをあるぶ、ぶあるとあること、あり、
ひげうぶる、蒸餾水、ぶるを、ぶうて
とりたぶる、

ひとのことばでつくれるたちのこと、たとえばさぶまれせることなどをいう、

ながれだち、流体、ながれのやうにながるるたちのもの、

ながれもの、砂、

ながれのおね、けいがらのもの、むせびねともいふ、このあるとまたのねとのまざりひめのべろといふあのぐのもと、またさまのおねともいふ、

おぶも、義布斯、（石青）、

ひのもの、ひのつきやまのもの、ひ、

ひとえのもの、単体、ちりね、むつびたあるのるいもの、

ひとえ、ひとつのもをふむもの、ひとあるまものでいひとつとあるのすをふむいふまものでいふるのもをもひとえ、ひとえをもとえ、

ものだち、蒸氣、も、

ものつり、化学又舎密、又分析、ものをつりあるまものことをつりあるまものをもとふこころこのことをひとつにものつりとネーづけるせいもとづけるまたこのことにうつてあるちからをものつりのひちからとふ、

ものつりのまたあるもの、舎密親和、ものつりのむつび、ものつりのひくちからとあるまの、

ものつりのもの、微質、ものつりを、せ、ものつりだち、ものつりのこぎによりてできるたち、

せつりもの、舎密、ものつりをもの、す、

ものね、酸素、ものでるるびにものと、はぶちのもの、

ものでのるがね、酸化鐵、ものでるがねのさび、

ものでるめ、酸化物、ものねとものるのあるねとのまざるひめ、ものでるがねのさび、おがねのさび、ものあるもとものあるもの、

ものでるもの、酸化、ものでるもの、

ものねもの、還元、ものねをやきとる、

ものるね、炭素、ものねのきのものいものねとあるまざ、これもものるもの、ものるもの、

ものるもの、炭酸物、ものるのものとものるのあるねとのたちのあるものをひきるるものと、これいただきるものるもの、

ものかぶのもの、蓚酸、又酸摸酸、ものねをものるびねとものるのあるものとものるのかぶとふことばのるまるとあるる、

ものでのるがね、炭水瓦斯、ものるのものるものるもとものるのすとるげる、

ものるもの、酸類、ものるけるものるのもものるのするねのするもとものるもとものるもとのるのふ、

ものるもの、酸類、ものるけるものるのもものるのするねのするもとものるもとものるもとのるのふ、

ためあたそのめのうろまみび
ひとつめのおそきうろ

一めのうろのまみびいこのせかいをいっぱいたとこ、らぶるひとつめのもののうまれと、きそのたびびのとのとかいらこまれた、ふきぐきのまだうろひめのとそ、いやくまみびである、

のめのもちまくと、そとうろまみびまるめのおそそろくぶひとつめのめいあれねとそ、ふまのよにあれとまるめのおそそろくぶである、とのあれねぶたびにこまれひとつ、とのせかいのそのけや、そのあれぎのうまれや、まるふぶのうえのめや、うぶのうのあぶ、きぞとのよにまる、めうまる ふきぐのめをうまれとそいうろてある、

ひとつのものいぶうまれとも、そのみうにいうまれてぶるめのぶ ふい、たうぶ うぶねい うぶる ひとつのめさだまる、ふせといべ うぶねのみうかい、ふまも ひまれとぶる めのぶふかいからである、まぶうひめいひとつの

ものの せいと とで、ものうの の きこまむ ちからで、いうの こまあさ あである、
まで あつちの あびに ある、あるる めいあそこ まぎらひめと ゆく、
のものである、ほ いとう と、ふびね いびらも、ひとくの ものである、それ
ぞれが たがひに むくば、いとうでの ふびねと ふ まぎらひめと ある、
たゆあ、ふびねの やもう ふびと ふうて、その あもこの ふびの いとうと よく
まで、これと たゆあぎに れ、せうちうのひのれのれ ゆ ゆぎう ふびら、ひとまる
ゆび で、その ふう と ふまぎ、れのけの の えびらね ゆうゆ きる と、その ふびれと
いとうが その ゆこと で、ゆさうて、いとうでの ふびねの
まぎらひめ と ある、この ふの ものハ もとの
いとう である、まこ ふびね である ふ、
二、ふれ い その まと かね と、かるどき との えたつ
に ふる、いぎに ふれの あもま ものと あげ、

かるどきの ふれね、

まいね、
むせびね、けぶたちのあ、これい ゆまう れのけのうちにある、
ふづね、きれね、おにびね、ふうどね、きこね、まきうね、ど、

かねの ふれね、

やまゆね、ふの かねい まれね と むびて やまゆと ある、
ふまゆね、この かねい まれね と むびて ふまゆと ある、
いまゆね、この かねい まれね と むびて いまゆと ある、
にがうね、この かねい まれね と むびて にがうち（まびねまや）と ある、
ふうがね、ゆがが ね、こたむ、もぜ、ふまり、まんがね、ふむね、ふびがね、
まうがね、こがね、ぷうゆね、ど、
三、せかの に ある ものの のうちで、めにいひえのあの やうに えてゆ まー
つたへ、いや一のたちの まが ふい、ふえべ ふびいひえのあの やう ふれども、
まつたくい まいね と、ふづね とのむびで できたあでである、また

それのけいまいねと、おせびねのまぢろひめである、つねにたべるあれいあれねと、らしゐねのまぢろひめである、このかかいとれにきらてあれ、

四、ひとりからいのたちの、べろをひとまで、ここにいろろあたべがある、

ひとりからいのかそうたたべひ、

ひとりからいのかごのひとりからいまこびたいあのだいじにあるいそのだいじのひとりからのうけである、

また、それのあれそらにかかりて、あまつひのまわりをめぐりまわりておいぬい、その、あまつひの、この、それをひとりふじである、このひとりふをきりごのひとりらとぎろ、とれいそのあのあのまびごにありて、いづれもそのあのへだつまびごののりにきまりがある、

五、まびねいとのひとりからとれいぎろくいまのうがねをひとりからでたれもよくありてあるとである、

六、それをとるのひとりからいあるいびひろのうだ（ここまたへうぎゆふでも）

をかるうきとねのうれで、ひぢこときれべ、こまろはうこかをひたつける、あかあこ二、そんきのかをそんにまいひとさき、かこねであぢろ、つあでとぢやくときれべ、ひたとこ色てもたびかひとりきあ、これをそれきこるのひとりらといふ、

七、へぢろひとりからたかあこ一、いまきれるとぶこきでひとろのうきとぎろはきろろ、まこふたびあいせれべ、まろろとへぢろく、たかあこ二、ぎまとのうきをふろろ、そろ、いづれもそのからいとぎろだ、そのとぢがこきとろをまるわまりーあがら、ときろあいせてまけべ、ときたへぢろく、たかあこ三、ふろのみぢくたかねのいたを、ときたまいせるとへぢろのとたかきこいきれねこれらのたかあこのあからをへぢろくひとりらといふものうきたたりてかたたのぢるへ、ときそのごこときろあ、ひとりとのあびごにある、へぢろくあらのあるあふのである、ふきそあのかこちへぢろのけぶろのとろのこのこいろであるが、いまろそのへぢろくちからのあこで、かこちのかろてある

のである、

八、かぶらいしのひとからから、これはとよう（ぞうく）ちからのひとつである、

なぬき一、それはびんごろのぐをぐるぐるのそれはあるゆたかこのぐりあげる、

なぬき二、がらぐごうのひとかけをふたつにそれをたれのうぐのうえゆあげべ、そのうぐハうぐとりてのぐる、これらハうぐかぶらいしのひとからゆうるめである、

ものうろうのひとからから、まとうち

まだまを

九、いろうとうがねとをまぜるとハひとつめのきうのあるにあげたうろうで、たぐふたつのまるのうろうとめかにぐちとて、あかけだちゆうまぐまぐのまぜるのであるが、あろうろうのまるまをぐにたにまとものうろうのかげも、まぐうがねのかげもうまる、

あろうろうだちのまるまをハみかのひとからのたぐひとやとうて、あろうろうとのあひだにあるて、ともにそのあとともあるゆるに、（ぞうく）ちからにゆてある、さうとて（ぞうく）ちからハおまぐたぐひのうろうとのあひだにあるがまだまを（あうひにとい）ハあがったたぐひのあのうろうとのあひだにある、またへぞうく）ちからハあのうまれぐちにかまるとといハあいが、まだまをハそんぐよくそのあのうぐらと、うまれぐちをいちぐうまぐかて、まぐうひりをうろうまる、

もぐて ものうろうのかたちがうハまだまを とて、あろうろうのひとからからぐぐる、まぐうひと、それどうひをハとのあろうろうのうぐのぐぐえである、

ちがつてあるたぐひのうろうがうまぐうひとりふ、

とをまぐうひとりふ、

うまあて できたひとつのまるがいろいろのたぐひにひかれるとと、それどうひと

ゆ、

ためし、

一、ひとつのちやうんのこづゑ、もとまきのあぶらをいれまべ、そのあぶらハこづのうへにうかまて、もとまきもまきまといふ、これハこづとあぶらとまきまきのあハうである、　二、これにあむもにや（ぞうまやせい）をうまて、びいどろのぞうでかゝまれべ、あぶらとむびあて、ぱにめんとゆふこぞんのたちのあとゝ、これハあぶらとあむもにやとまたまきのあゆまである、　こゝハぎうとさむびのたあひである、

三、まゝのちやまきのこゞんだちのまぎろひあに、ふたれこれのいろうのもと（うこんもも）をうるゝと、あむもにやハいろうのもとふかくまたまきがあるゆゑ、そのあぶらをまれ、いろうのもとこゝまひて、いろうぎのあむもにやとゝる、そこで、そのあぶらハひとりまれて、ふたゞび、こづのうへにうかむ、　こゞハまぎろひとれどひとのたあひで、これをとあに

ひとゝのえらむ　またまこと　とゝづゝ、

四、かるまゝの　まぎろ（えんとう、また　うろど　まろ）とひとちやうんのこづに　こかまこ（ゆ　まこ　ぞ　こ　ぞに　こかまこ　まる　ぞ　その　まゝの　こけ　まる　ぞ　と　ゆふ、）ふたれ、きれのいろうのもとをうゝれべ、いろうのもと、まろのまぎろひのがとれもまこ　ひとゝのえらむ　まこをおどこそ、そのちやうんのもとにたまる、これのまぎろのたあひである、　五、かるまぎのまぎろのこけまるにいろうぎのちとめと（ぞうせう）のこかまこまるとふたれとれうれべ、まゝのため）のどく、いろうぎのまぎろのとゝうて　おどこ、そのかもまぎのちまもとゝけまるのうちふのるゝ、　こゞハそのまぎろと、まるとのたがひのいとかろで、とこに　これといまゝ　のえらむ　まぎろまこのたあひとゝづゝ、

十、まぎろひと、ゆどこひとゝいねふかむもぎとびとゝぎこにようまで　ゆ　ゆである、　いま　ようまこの（まゝまのいまもと）のひとかけとひのうちふれまゝに　ゆべ、もとのまのがまとゝづけるひとろの

けずめが こびたもの、あこが きのあだし と ゐる、きき（きょうぐる きもね）
いわれば、わのけの うちにある きもね と、その きみね とそつねの すき
と むすびて、きとのき のがき と ゐりて、あがいそのけのちちにこびちりて、
あだかも きえゐるが ごゐ、されども あめちの あひごの ごとかも ごとまりて、
ゐゐゐゐゐゐき の、ゐきゐき のといふといふ、たごそのむすびたあにゐりて
その かれわを かる だりである、がらごとちの ひとかけ とごゐ ゐかせば、
ききこゐりて きとゐ も ゐえね、さりとゐ ゐゐりたのでいき、たごとごと
むすびて、さとちの とけゐると ゐりたのである、 ゐぎにゐりて、その
ゐかの せかにゐあの、ゐりかたちのかるとても ゐぞらして ゐれ、

十一、き、と あと の ら きれだち、

ためき

一、ひとちの ちゐえの ゐごに、いとちの きと ゐごりたらゐ、その ゐごを

あがいひて を よ、よれど きの あゐ をゐり、まこ あかゐの あきい にだゐ ゐる
れいつれのあかゐ とこまろ ふ きごと、ひたひた だらゐ
にゐごと ゐゐ、きとゐの あひだ にだゐさ ゐる で ある、と、ゐかの ちゐとえの ゐごに
ゐりる、さそ との ゐる ふ まの ゐ ゐきめた いとちの きを きこゐ たらせば、その
いろが あかく かる、この ゐゐ いれかの きでも ゐゐ とで ある、
この ゐりの ゐごが きの あがが ある だかりで、きの あきい いろ
を あかく かる、 二、あがきにや、と ゐきあと、ゐとあと、いいねにありふれて あて
かゐる あとである、いま 夫の ゐゐ あかく ゐりた ゐに、あむもにやの とけ
ゐると ひとたらゐ づつ たらゐ、その あかい いろが ゐえぎ がかりた あを にかる
きぐ ゐる、 さそ その ゐを ひと たらゐ づつ たらきめば、ふれたび あかい
いま また あと の きを をあがそて とよ、きとやきの あがい ゐい、
いろにかる、これいいたびも その ゐりである、 その ゐりあと
いきの あかりを ゐかる ゐき、ゐきの あを をもえぎにかる、
つまとむき これいきの ゐくにゐる ゐとけで、あゐる
とゐ ゐの ぐふいる あで ある、で そのゐた かを いつねに

もとの、まさきと もに ねかね もるとを ときだめるに ものある、

三、あむもにや の まるに、いろろの もを たらす ながら、あもいりとむもの そ
めがを をいれて みて、あめて かるる まで ふくる、これが いろろの もと あむもに
や との むつびた とけまるで いろろもの あむもにや と ぶげる、 さて おろに
つけた ないその まぎらひた まる の ほかりもまいやうに、ほりぶげた もので
ある、

実の とり もと の もが いまもと と ふまへべ、これを
もとも のいまもと とぶげる、この ものかも おまま とである、

その ものかの いろいろな まり をも、ときの とり ほうぶげる、

四、おにびね の ひと かけを とり、びいどろか、ぶき を いねの さいの まるか
に ちき、その うえに のせ、ひを つけて、もぐさま あやきを かぶせた びいどろ
の えを かぶせかける、 ここに その おにびねが もえれば、その けの うち
の もの ねと むつびて おにびね の もと まり、びいどろ の えの うち に、
まろく ふる の さまた のぶりついて、つひに いやきの やうに、さいの うへ ゆ

おちいる、 この ふる いち まい もの あじが ある、
ふる その ひの ふえた あとで、その さいに ふる
を もとも いぐと、その ふろい ふる いとけて、この もと
の ふけ まる さる、
この もの いまもと とも おにびもの あむもにや と むつびて、おにびもの あむも
おにびも の いまもと (これ いまもの おにびもの うへもと ふる、いまもと と い
この ものの ねの のもとである) と ある、

まへの ものに かき のせた まかたで、いろう と もせば、その もる いろう
い ものの けの うち の もの ねと ふる まかたで、いろうで の もと ふる、いろの ふい
がも の さまで、その びいどろ の えの うちの うちに のぶる、この うちに むびた
いろの ふる (で ふけれ ば りとむも の そめがと) を ふけば、その いろが きえる、
また この さの に ろを もとも いぐば その がも が とける、 この まかた

の　こゝろ、そのくだりと　まがくて、いとうの　をを　とれば、あくの　をねを
ふこむ　こゝろ　で、いとうで　の　を　よりも　第　つよ　を　とる、

とけまる、

十一、ある　まゆが　ちゞの　うちに　とけれ　ば、その　まゆが　こゝる　とふて
とに　その　まゆの　とけまる　を　とる、
ちゞめの　とけまる　いものゝ　の　ひくわかの　の、どく　ぎと　また　ぢやく　を
とき　わかを　に　よ　ものである、　ちゞ　いさとう、つねの　糸、いとうの
を、あるとある、など　と　よく　むつぶ、　ゆれども　ゆぶら、　ゆあとる、　など　と　い
わつて　まゆる　けまき　も　ない、　まゆ　ゆ　いよく　ゆとるに　とける
が、ちゞ　に　いとけ　ぬ、　ゆを　その　こかを　を　ちゆる　てだて　い、　ゆたたゆる
と、かきまい　を　とで、　ひとき　い　ちやく　ぢきる、　また　とい　とけるを　つゝるに　い
その　ちゞめを、いねの　ふらと　に、その　まゆ　ものと、ともに　ゆれ、よゆかど
の　ゆひた　にとかを　のである、　さて　いまゆと　いちゞに　いとけると　が

きとる　ゆれども　その　きまを　とぢけ　ちゞに　とれば、その　いまゆと　の　きまが　ちゞ
る　ゆどよと　とける、　ゆを　とけまる　を　いつに　いゆげちゞを　もゆゆる　ちゞ
ゆれと、ゆゆと　の　とき　い　きよゆかゆ　ゆまちゞが　どく　ちゆゆ　で　ある、

ちゆゆ、

一、まちちゞ　の　ちゆゆ　かけ　と、ゆとまる　か、　また　せちゆちに　ゆとて、　かきまを
べ、きとまゆに　とけて、ゆとまる　の　ちゆゆ、　きれいな　まちまち　の　とけまが　ちゞ、
との　とけまる　を　ひと　ちゆとん　の　ちゞに　いぢゆれと　べ、ゆとまる　い　ちゞ　と　ちゆべと、
その　まちまち　い　まゆれと、ちゞ　の　ち、ゆ　ゆ　ちゆむ、
二、きとまの　いまゆと　を、ひと　とつの　ゆまちゞ　か、　また　いゆげちゞに　ちと、ゆまぶ
ひと、ちゆを　ちきき、とつの　きに　に、その　いまゆと　の　ちゞと　の　ちどまで　きと
まき、その　ちゞまと　ちゆちに　いぢゆける、これが　いまゆと　の　きよゆかゆ　とけまる
で　ある、
三、きとまの　ちゆゆと　を、きとま　ちゞの　ちゆちに　の　ちゞに　とかきと、その　糸

の きよらかな こけもの が できる、この とけもの と ふた れと たれ いもあとの ふり に ふれば、ものの いもあとの ふまに あるむいて、ちちの やうに ある、これ ふれ その ものの もが、やまあと ふろも、いもあとに その ものを あてこめる面 ふ、その いもあと と むつびて、やまあと いその とけもの のうちに のこる、これを ものの いもあとが えりあどむ といふ、これ いや とけね ふまに あつて、ちや ふん のそこに ある、

四、いもあとの とけもに、ものと ふまれて、いきと つけば ものの いもあとの ふまに あつて、ものろの やうな ものが できる、これ いきの もの が もが ふぐふぐ ふり で、その いもあとに むつぶのである、

ふたつめ の かれきろ、

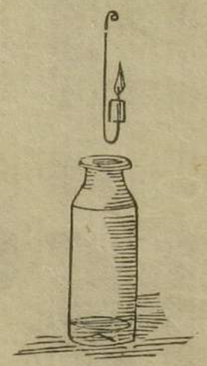
ふもな いと の ものの もちまへ と、まだろひとの ふり やもい ものめ だと の ものき、

十三、ものけ の とれば ものが もが、きの ものと ある、これ いまとの ものけで、きを もせば、(ものと たきの やこやうに)のんど い とものだちた かたち の まとの ものね である、ものね いかの ものめ と むつびて、たんめ、いきめ、ふもめ、ふもに やまめ、のうちに ふこむ、ものと ものけの まに やけば、ものの もとある、これが いかたが ある、また ものの ものを けば、ふもに いきめ の いのちを そこなふ ものである、

ものめ、

一、ふけいもあとの (ものの いもあと) の ひと かみと、ひろの とうに ふれ、いろうの もの (ものい ものの つよい もの) で ふれば、ものどろ、これ もの ものの が ものが ぬけで、いろうもの の いもあとの ふまに ある のである、とに いいろう の もい ふけいもあとの いもあと と ふもあひ、また その うち の ものの もい が もの ふまに ぬけである のである、

二、まゑのためゑで、まとのものがゝ ぬけるときハ、あひゑひと その
とりのうちのゑのけと まゑだあて、そのあとにとゞまる、おもいがを とのゑ



がをハいろがきて、つねのゑのけのゆゝで、めゞそゝこからゑハ、さるとそのあ
るさまハあのづからこゝろ、いまらふそくの
ひと、そのがをのうちにさゝられゝば、その
ゑのゑハたちまち きゝる、
とのとりまとのすのがをハ、ゑかのがをにも ある とりひのゑのゑ
をけを、また まゞにハつかゑ、

こゝづね、こゝづの まゑひ、

十四、こゝづね（ひどうぢん）ハいろのゑの もゝるがを で、あゝちのあひゞにあり
て、まとにかゑハ きる で ゆる、 これハゑのけ こゝろも十四、ゑハそんかるハ、
こゝづハとのがを と、まゑねとのまゞこゝひて、できた あゝ である、こゝづねハ

きゝ ゝ ゝ ゆゑ ゆゝ や、ゑきゝ のあるがにと のぶの、まゞこゝひゑ のうちにある、

ためゑ、

一、こたむのきりこゝとまとゑ こゝ、ひゝろちのとりにゝれ、（まゑのづとゑよ、
ゝれふらまゑた いゝこゝろのを（にゝこゝのをのつゝのと、ひとさゞゑ）とつゞ、このまゞ
ゆゝハまゝゑかに あるだつ、ゝれハそのこゝづねのがゝの、あぶくと ふきだを ので、
ゝれが ゑひゑひ ゑのけと いゝかゝて、とゝこゝのうちにゑちる、 このとりをきの
いゝ、またハ ひゝどうゝた、まゞて このてだて で、つゝかゞのためゑハ、ゑまひハ ひゝどうゝた
のゝゝゝゆ こゝに ゆる、で かゞをせて、そのそとのゝのゝゝゆゝ ゑのけ
さて このゑゑの ゑゑのうちに さゑゝゝる と、そのゝのゝゝゆゝ、そのふたと とりのけて、らふそくのゑのゑを、
そのがをのうちに さゑゝゝる とき ハ、そのゑのゑを けを、けれども そのがをハひを
こゝりて、とゝこゝのうちで、らをきゝゝろのゑのゑを たてて もゝる、
こゝづねハつねのゑのけと まゞれゝば、ゑをゝだ まゞこゝかに ゝゝる、また ゑに ゑゝと
かゝゝく ゑゝと ひゝゝく ゑ も ゆる、 ゝれども ここに かき のせた てだての、ためゑで

ハ、あぶら　こといき、

この　ためし　でいいこと　の　ま、　あらびに　ろの　うちの　まいね　と、　さたむと、　そも
ゆ　むすびて、　いとうも　の　まいでの　とたむと　ありて、　その　とけ　る　の　うちにとど
まる、　たゞし　その　ろ　の　うちの　ろぐね　いがも　と　ありて　とびる、
この　とおり　ろぐね　いうえて　も　れのれ　を　たるため、
二、　まく　の　ためし　の　とおり、　ろぐり　の　うちに　ろぐね　を　つくり、　れのけ　と　ながいで
まて、　ろく　で　うちと　ふさぎ、　ここゆ
れれい　ぐ　と　これ　ま、　その　ぐ　の
うちからでる、　がすに　ひとつけて、
この　ちひさな　れのれ　と、　さまたた　ま
八、　ぶ、　ろがさ　一、　ま　く　五、　ま　ん、　だかり　の　びいどろ　の　ぐに、　ゆ　さ　ん　ぎ　ん　ま
こむ　と、　その　ろぐね　の　ゆ　る　ゆ　つて、　れのけ　の　うちの　まいね　と　むすび、　ここに
ろぐ　が　できて、　ぐ　の　うちに　つ　の　ま　ち　に　ま　ま　ろ　く、　また　ろぐ　ま　ま

て、　その　ぐ　が　ま　ろ　め　の　ね　と　ま　こ　ま、　この　ね　い　その　ろぐね　の　ゆ　た　ま　と
の　から　と、　ま　ろ　ふ　さ　ぐ　と　そ、　ま　ま　つ　れ　の　け　の　ま　み　め　ひ　ま　ま　る　の　で、　ま　こ　ま　ひ　び　き
で　ま　る、　た　ゞ　ま　ま　ろ　の　か　れ　ま　と　ま　る　に　い、　ま　ま　い　た　び　い　ど　ろ　の　ぐ　だ　ゆ、　そ　の
れ　の　れ　と　さ　ま　ま　ま　み　て　ま　よ、

まいね、と　むせびね、　ゆ　ま　つ　れ　の　け、

十五、　ま　ま　つ　れ　の　け　い　ま　い　ね　（ふ　ま　ま　ぐ　ん）　と、　む　せ　び　ね　の　ま　ま　ろ　ひ　め　で、　こ　の　ま　ち　に
また　つ　ね　に　ま　ま　ま　ま　ま　の　ま　の　が　ま　を　ふ　く　む、

ためし、

一、　ま　ぜ　ら　ふ　の　ら　ふ　ら　く　に　ひ　と　と　び　ま　て、　だ　の　ら　く　に　ま　き、　れ　に　よ　く　か　ま　が　ま　た
び　い　ど　ろ　の　つ　び　を　か　ぶ　せ　れ　べ、　そ　の　ま　る　ま　の　が
そ　の　ら　ま　の　ま　い　ね　と　ま　ま　の　で、　そ　の　れ　の　れ　が
ま　ま　ま　か　に　ら　ま　ら　ら　く　ま　り　て、　つ　ひ　に　い　き　ま　る、　さ　ま
ま　て　そ　の　つ　び　の　ち　ち　が　い　に、　ま　ぐ　が　つ　ま　け　だ　ま　て

まる、　ここに　その　ふくろ　の　ひの　きる　の　ハ、その　ちちの　ものねが
のえられて、その　ふくろ　の　ふの　ちゞねと、ものねとに　むすびて、ちゞと、
ものの　ものが　もとに　ある　つけである、　ふたつめの　きりの、四の　た
めす　と　こよ、

二、ふくろ　と　とぶたて、（ろくと　とれた　ちがねの　さき　と　まげて　たてる、）
あれきる　とりの　ちちに　まげき、その　とりの　ふちと　ふさぐと、その　や
の　ハ　ものに　ちものらく　ありて、のち　に　ハ　きる、これ　ハ　その　ちちに　ある　その
けが　ものや　ひえるもの（ものね）と　もの
あの　つけである、その　ふくろと　とり
だす、また　ひと　とものを、ふたたび　その
とりの　ちちに　いれ　ば、その　その　ね
いすもの　に　きる、

いま　いきて　ある　いきもの　と、とりの　ちちに　いれ、ふさぎ　とめれば、その　ちち

の　ものの　ものね　と　ものい　ものを、また　その　ふくろ
三、つねの　ものの　ある、あれきる　とり　とり、その　ふち　と　ちゞの　うえに
おき、べつに　あるもの　と、ひと　さきの　び　と　で
おのれの　ものと　ふさぎ、まげた　ものを　たむ
の　ふだと　ふくろ、ものと　の　あひだ、その　とり
のちの　ものの　ものけと　ものひたり、あの　たつと
すると、その　ものい　きごとに、ものが　とり
のうちに　のぼり、また　ふくいきの　たびに、
ふくる、いま　この　とりに　ハ、その　ふくふくも　と　とりて、ふくた　ものけが　とる、
この　とりに、二、の　ものも　の　とり、ひを　つけた　あそく　と　さあ　いれ　ば、やち
その　ものの　ものの　ものい　きる、　ここに　その　ものの　ものけ　の　ものね　ハ、ものいきで　もふとれ、
その　あとの　ふくた　ものけ　ハ、ものあ　から　その　ものけの　ちちに　ある、ものびね　で

そのこうのうちにかうて、ふくいきのきとのすがをとまぎる、まゝ十二、の、きりの、四のためをとよ、

いとめいきとつくゞあひで、きのねをれのけのちからをひとをそ、そは

とをとのすめがすにかて、ふきだを、　そのとをり、いまいのきいめいきの

たゝをへちのちめきとねとそ、きとの（たをるめで）ある、

とのとをり、きのねいただれのれだりでを、これまたいきあのいめちをた

ゐ、

四、げぶめまをびのをとのちの、をぶをかぶてゐるたなに、をぶがねをたて、

そのえにちいをるちとをとのせ、これにおたびねのちひをるひとかけをおい

て、そのおたびねにひとつけ、これにおれきるつぎをかぶせろ、そのおたびねいきぐ

てそのつぎのうちの、れのけのきのねをもあつくを、とこでおたびねのを

とをり、をのあとにおせびねをのこを、そのつぎ（そのつぎいまだをぶの

うちにおく）のをぶをちどかせべ、そのをぶいのぎりて、いまゐえきろた

きのねのかきだけにきちふぎだを、とこでそのつぎ

のうちのがをいそのえぎめのれのけの一三

ぎかりとをる、そのをろたとをろいおせびねのがす

である、これでれのけいそのかさの斗が きのね

で、　その四五が おせびねである、とふをがをる、

五、おせびねのをろ（そのうちをびいどろのせんでふきぐ）をとり、そのうちを

をいむけにをそ、だいのえにおき、ひのをぎりてゐるらふをくを、そのがをのうち

にきげいれをべ、とのれのれいきえて、きぐでもそのがをにひのつくとをを、

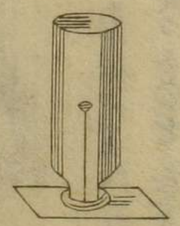
このとをりおせびねいをぶねのやうにれのれも

ただを、きたひもつかず、

六、をどりのきのをををろ、びいどろのをぶのを

のうちにいれ、をぶをみて、ひをろ五をを　ゐき、

きろひのひかりにきれば、そのきのその



まるねのがまをふきだまものがこえる、
このとおり、ふきさいまるねのがまを
ひとむ、
七、あれまの ふまあこ（とのあれいあり〈すいねをふくむ〉）をとにあて、たゆあ今にいれ、
さかれづのれのれにあれば、そのあれいこのねこで、それぞれて、まいれ
のがまと ふきだま、この ふだのもちにかろく
もびをあて、ふるけそのがまにまぐろ の
のあいやうにまる、さて つぎにひを
つけ、このがまにさまあば、その れのれい
まもきす あかるく ふる、とにそのひのこの
のところに、その れのれを ふきけまた つぎを まれば、また たちと
ところにそのれが ふる、ここで ちぶのまいねいりえるものを たちける
まれたものである、とけをが まれる、

八、いまむひこづをびいとうのちゃうんにつぎ、ふたときたかりまあけば、その
こづの ふるに、まもまのいまあこの、うまかいを ふる、これい あまろそのけの
ちちの、まもまのがまがきて、いまあこにむつびつく ふるまである、

あむもにや、

十六、このけぶだちのものいむせびねと、こづねとのこまあふたものである、
このがまいまびいまくこづにさける、このとけふるいあむもにやの ふる で、
またろくかくせいといふ、これいまびてのまとふくむつびて、いろいろの
あむもにやの ふれと ふる、この ふるいつねにきれたきものから ふる
で、 この あこりでた あむもにやいこのけのうちにうかえて、あり が
れば、あらひ あちて、だいぢに ふることみ、そのつちをこやま、
まいたろうひとの ふるごえ、むまあごえ、ならびにごものうちにあって、ふ
くきをとやまものである、

ためま、

一、ためまがを　を　おもにや　の　ゑの、とりの　ゐちに　あて　あけば、その　まと　の
あからの　つまさが　まわり、　また　それ　を　あけば、ぱんと　まま　を　つよ　に　れひがす、
二、びんどろの　びろ　を、ごろまれ　の　を　に　さまられて、あむもにや　の　ゑる　の　とりの
ゐちに　あれば、ごろまれずの　あむもにや　の　ゑる　の　けずりが　ある、
三、ごろまれ　の　を　の　とりと、むまや　に　かけて、その　とりの　ゐち　を　とれを、
ゑる　の　けむり　が、まく　の　ためまの　とり、その　とり　の　ゐちから　ある、
四、ふたつの　とりと　とり、その　ひとつの　とり　に　は、を　ゑ　の　あむもにや　の　ゑる
と　れ、その　ゑる　の　ゐちむさに　ひろがり
つよ　やう　に　ふり　まま、また　それかの　ひとつ
の　とり　に　い、ごろまれ　の　を　とられ、かるく
ふりまま、その　ふたつの　とりの　ゐち　を、
つぎ　の　ゑず　の　ごく、あらせれば、ごろまれを　の　あむもにや　の、ゑる　こ　けずりが
ある、

五、ごろまれを　の　あむもにや（ごろまや）と、きいまむひ　を　ひとまく　おるまむ　ひどづつ
とり、べつべつに　こみ　まで、これ　を　を　やかに　まぜあらせれば、ひどく　ねる　を　つれ
ゆく　やう　ま、あむもにや　の　がを　の　けずり　が　ある、
六、まもごえ　と、きいまむひ　を　まぜ、まく　の　ためま　の　やう　に　ある、ある　に　い
あむもにや　が　を　の　ゑもごえ　から　ぬけ　ける、
七、まま　の　あむもにや　の　とけ　ある　に、をかぶ　の　を　の　とけ　ゑ　を　つぎて、
を　の　あぶく　の　きえる　まで　ふりくる、　ここで　をかぶず　の　あむもにや　の　とけ　ある
とある、ここに　い　を　の　を　と、あむもにや　とが　むつびて、を　を　の　す　の　がを　い
ぬけ　る、

むせびの　を、　をるいわ　せうせきせい、

十七、これ　い　むせびね（にとろおん、また　あぞうと）と、きいね　の　まぞうひ　ゑ　の　で、
ゑ　まいだ　かるめま　ゑる　である、　これ　い　を　の　むせび　の　を　と、やまと　と　の　む
つびて　できた　えんせう（せうせき）から　とり　こける、　この　むせび　の　を　い

いかづちのことろくまに、そのけのうちにできると、ふとしいげにことろ
である、
かよそむせびねとふくむあるがにくのきえい、ふきれると、このすとかこも
むせびのせい、あむもにやのとかり、よくそのむせびねとりて、ふききの
そだちとやきふ、

あまつそのけ、

十八、あまつそのけい（あともきくいる）い、（えらきてくふくんどとて）ふくれもの
のあそうきだらでやたりつねのそのけのあるところとまべてきつける、これいどこと
ふことふく、せかいのまりとはつきそ、ごくたかいやまのいさだきのえ、ふり、
まださんおくたかりもたかくうちひろがりてゆる、ちかのきらずこののびちがを
まるこまかきふがれものい、ぞこうにつれて、だいげのもやだちとさきひきま
て、ふかいかるまのそこまでもくだり、またまるらるそらあるのもきにも
たひる、これいたとふきとかりて、めにもきえぬ、てゆもさいらぬもの

きれど、このあもさと、ああもめろうちいそのちかりてかけえかりて、そのむつびたきる
とみるけるが、さらにうたがふところいきい、このそのけのまぞろいい、いきうのの
ちにかくろそどのあそれだけに、こみあたまちの、いりうんだろぞのもきる
にも、さるかきかぜのふきたらふ、たかいやまのいだぎゆもあって、そのまぞろ
ひかたいいろこでもかることいきい、またかぜいりとそのそのけのらどくので、
らきにいほぞねとたまらせ、ムがにいかざるまとまいきて、ひとのかりのそ
ごとをたたらく、またこのあまつそのけいぬきを、ややせかいのうちに、ひとく
ひつたる、もどいちいこざるのである、このこざるのがきてい、ひかりもそのかのれ
にそきいたたらきときもとがむづかきい、またもやだちもこのそのけのちか
らでゆめや、つものさまにきてそ、ふききのえにちりかる、さそまたこのあめ
いふさきとそだちにかるめる、あむもにやや、むせびのもや、さらびにたいづから
のぶりかこる、いきいろきものと、そのそのけのうちからあらひをとす、
あまつそのけのもどだてにかるもきい、もものね、むせびね、もきのものがも、そ

らびに　そづの　もだちで　ある、そのうち　ものねいまへにかき　はたとろ、い
きものの　いのちや、のそるものの　たもけと　ゐる、かるめる　ものである、ただき　むせびね
いそのもいねの　こきとゐる　とつかさどる、　また　そのもとのものがもい
ろづかゐ　ゐのけの　うちにありて、こきのかるめるところの　こくものとそるる、
また　そづの　もだちいそのかるめるこぎと　ゐもかわに、いきものの　えだくや、こきー
きのうつつとるかもとともかねる、
さて　そのいきものと、のたがひの　かけを　ゐきうひあい、ゐるゐるのうちにく
ことのみて　ゐる　そのつうあひい、あると　あらゆるものの　よの　ものる　まで、できる
うまの　ぐまひの　ところである、　また　その　そのけのうちにい、いきうのの
つくいき、ゐらびに　きや、いまむを　や、また　いかのゐるもの、ゐらびに　ふされたいきもの
や、ふさきの　たちの　もの　から、たえず　もとのものを　そるる、
また　たがやまひとの　つとごえも、ねつの　でる　かけん　と　ゐて、つちのうちにか
けべ、もとのすのがも、ゐらびに　ゐむもにや　と　ゐびただもく　おこもて、ゐだう　きと

きと　ゐもゐふ、　その　ゐまうそのけい、もとのものゐそのもと　とふきにゐし
てそふる、また　その　ふきい、その　もひとる　もとねに　ゐゐもて、ものねを　そ
のけ　のうちに　もいて、いきものの　もふいき　めたらもまへを　ゐぎゐふ、
とにそるとも　ゐらは　かむつぎで、ものの　とのとうの　だめが　かのとうの　かるめと　とと
のふといふを　つぎに　ゐびる、いまとえのと、いきものといただひに　その　ゐがらふいのち
とたもけゐふ　とそり、もべて　これが　へらを　とろい、かれが　ゐぎゐひ　かれが　むだ　とそ
もてる　ものい　これ　が　いのちがけの　やゐゐひ　ものと　とる、　この　やうとうの
きもう　の、いちぎるもく　はかいの　もゐ　きで、やき　ぞどく　い、ゐやに　かゐとく　もゐまを
ものの　ゐぎ　にて、その　とと　の　まと　ゐる　へげに、ひとびと　の　ふかく　かむぎる
とにて、その　たふとき　の　もゐると　ゐゐ、
この　とそり、ゐまうそのけ　いつねの　めに　いゐえれど、この　せかい　と　ゐった　こりの
ゐりも、また　その　ぢづらに　ゐがれる　うゐや　よりも、さらに　たふとい　たから
である、

ためし、ぷねうまてく とて、けぶりの と あづかふ あかけ の ためし、

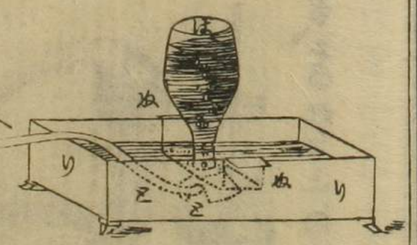
一、ごづを、ふだよりうちのうちにひく、 とにいふだで、そのけと まひとむと、またそのそとのそのけのあまと、のぐあひで、ごづと、ふだのうちにあるあかけが、 たまふだいとりうけで、あそく あのうりのあまにもちゐる、

いまゆびで、そのうへうちのい、と、

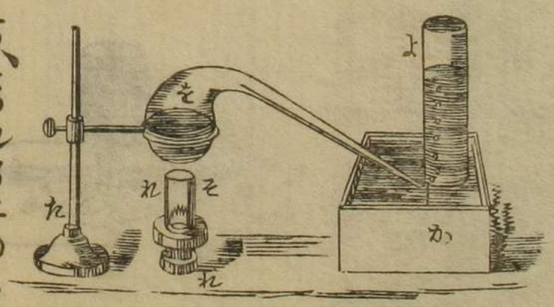
ふさぐと、そのうちのごづのいかかりとどまる、これをかへて そのゆびとのければ、そのあたのたまの、ちふさる うちのろ、ふり うれあるへいろいろあまつそのけ のうへのいとい けぶりのまるびのあをとをよ、

二、とりは、のうちにごづとを、これとそのおもごづのうへに、ひきー

ふりかまて あく、そのそとのそのけのあのごづのおを、のでそのごづいとりのうちにかかるとどまる、 この とりのうちに、へいと、ち、のうだと とそのを ふみば、そのそのけいあぶく とりて のびり、ごづとりかかる、これでけぶりのまるびのとこぶねのあがるあそのとが とかる、 この あのうりのざりとあた あかけいがを とり、またいがをつぎにとるのにもちゐる、これいそのとがい とこの、り、り、にてぬ、ぬ、のたるがある、このうへにとり、またいがをつぎとおき、この ちのあたにがをあるあをうどりのあを とをある、これとつかうと、ふ ときい、そのたるのうへと、いをん ぐかりちりふそど、ごづとつぎ、がを とうけやうと、ふ とりにごづとをて、そのうちと、そのたるのあをにむけあてて、がをのおる れるとのうちぐまと、まだにそのうちの を

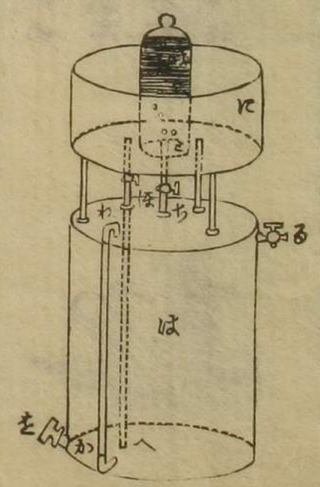


にあてる、そこでそのがまがとりのうちにのぎりと、ろうとうかゝる、つぎのあづでいをがれると、でがまをとおとをまぢろひのとられる、まのちちをたゝのわのあゝのあたにあてる、かゝけぶりのまゝびのとゝぶねで、ろうとをとる、よゝがまつぎたゝれるとのだのでれるとをとのせるきでつゝたわとそゝゝれゝあゝがまをとゝあびで、ひづつのそゝとゝゝ、これゝがまをとつゝるにつゝゝぬゝのつゝるときゝ、これとれとれるとにあてる、さうゝがらがまにようてゝたゝべゝろれのやうゝゝゝあゝ、そのそとのぬゝゝのたゝゝけとうゝゝとも、それるとのうちのものかられどれる、



こころえ、このてだてで、がまをとつゝるときゝ、ぢがまにゝ、その れ
るとのうちにとりてゝあゝ、あまつほのけのまゝるとゝふとゝとゝろえねゝ
ゝゝゝ、ここにゝゝあゝがまがゝゝあゝれるとのふきの、ふたかさだゝりゝゝく
ゝゝるゝゝだゝゝきよらかでゝゝゝ、またがまゝ（ろうねのやうゝゝゝゝ）によりてゝゝ
あまつれのけとまゝゝるときゝ、たゝゝまちふきゝくゝゝゝことにこゝろえよ、
けぶりのまゝびのとゝぶねのうちで、がまをとのつゝゝゝろうゝかのつゝにゝうゝ、
そのがゝゝとゝゝゝいからゝゝろにゝうゝもにゝゝゝゝゝの
ゝゝたのふちをゝゝろゝのゝゝちにあゝ、そゝゝゝ
ゝろとゝゝゝのゝゝゝゝゝかたゝゝれゝゝゝゝあゝがまを
ゝゝゝゝゝとゝゝゝゝゝ

このつぎまかる　まかりハ、まろぎりハ、
さいだつぎりのうへハ、は、とうへの
あいてゐるとゝのに、とのあひだ
にさんがんの、さきゑだまのとたて、
ゑたてる、このはへハまつさきゑ
ともあいてゐるゑだで、えのをゝ
ゝり、またのをゝのをゝまぎとど
き、とちハまたひとつのゑだで
ただまたのをゝのうへにもひる、ほ、ち、いうへ、またのかゝひとちとあゝる
ねぢぐち、るハまたのをゝにあるがもとひきぬく　ねぢぐち、をハがもだめの
はにがもとひく　ゑだとぶげる　ゑだ　ち、わ、か、ハびいどうのゑだで、またをゝ
のそとのそこから、かがもに　まで　とぶてゐる、これで　ときにハ　またをゝ
にひいたがもの　たかとまらゝる、さて　またをゝのは、にがもとひにハ、



まづは、のうちにとぐをこそるにほ、ち、る、のころのねぢぐちをあけ
を、とねぢぐちさいで、うへのをゝのに、ゐこぐをつぐ、そのこぐハほ、ち、の
ゑだをとりて、は、にまとり、る、ゑりそのけをおまだも、いま、は、にを
づがこそる　ときハ、ほ、ちる、をねぢまめて、またちのをとねぢ
あける、このがもだめのは、にこぐのとどまりて、めれまのハあまりそのけのか
もちかりであだかもまとだろのうへにあるがあれば、そのさけハそのを
かにかかりとどまりて、でまハとをぐとで　ある、とで　またのゑちのを、に
れるとのさまだまたゑちをまをもむ、そとで　またちのを、ゑりがもが
あぶ　とりて、がもだめのうちにのぐりあがりて、こぐとりかろ、またがも
つぎのよ、にがを　をこるにハ、まづうへをけのに、にこぐをつぎほ、ち
のねぢぐちをあけ、とで　ほ、へ、のゑだのこぐのかもちからで、そのがもが
あぶぐとりて　よ、のうちに　のぐ、
また　そのがもハる、のねぢぐち　からも　うへ　とれる、

いつそう、

この おれね いごく かるめる まるで ある、たまに いきま、うんぜん、あらびた あの かの
のやま から も、うぶの ままで、あびたごまく ぐろ、これ いまた ふろがね や、あれ
がね と むつびて、あちら こちら かい あるく いごる、
いつそう の もい いつそう の ごく かるめる まるひめ で、いまおこ、うまおこ、にがつち、
ふるこ の、いろいろ ふれだね と むつびて、やまもの の せかい の、いつそうぢもの と あび
たごまく いだき、

ためま、

一、いつそう と ためまだ れ いれて やけば、むまめ い とけて、のち に いけぶと ふりて
のぶり、その ふだ の つめた の ところ に とり つる、なれ ひとめ の きり の、一、の
ためま、ふらびに ふたつめ の きり の、五、の ためま を を よ、
二、むれいと の とけまる に、いつそう の もと ふるきび、いつそうぢ の ぐれいと の まろい
あどもと が まづむ、これい むせび の もに いとけぬ ものである、　これい いつそう の

もの けと ためま に よの まる である、
三、いつそう での ふろがね を とろう に いれて、うもの いつそう の もを そのうえ に そそげば、
いつそう での ふるねがも と むまも、ふれた たまご の にれひ が ある、まろの かを の ぶま、
いと もかぶも の ふまり の とけまる に ひたまて、その がも の とろう に かけさげれば、その
かを いつそう で の ふまろう の ふまま を あらいふて、ふろく ある、
いつそう での ふるね と、ふるいろう の もい いろく ある、また いろいろ ふたごひ の かね の
かるけ と、ところむる ためま ふもり と まて、あやく ある、この が も の はぶい いきもの の
いのい と そこふる ふる、かねて ところえ よ、まで ものもり の つぎから あるる けぶもの と べ、
とれざける やう に きと つけよ、

かにびね、

二十、この おれね の まる いごく ふく ある ものである、かるいも ぢちん で とる ふく、よ、
れい その ふま も、その かなさ も、まと に よく ぢらに にる、これ いぬ ぢり の うち
に ある、また けもの の れね の うち に ある、

ためね、

一、かるいたおにびね（ゐすある）とかをにはつき、さあもだめのので、とぢやく こまる、この こまりでぬきをとおとね、もをもかにひいとめえをもを、

二、おにびねのひとかけ（かをのきれたね）につき、とあてくらいとろのかべに、もぶとかけべ、そのもぶがひかりあらはれる、ゐれ ふたつめのきりの、四の方面とをよ、

三、おにびでのこどねがも、とたむのきりろぶと、おにびねのもとをとびいどろのうちにはれ、くらいへやにもちもき、うもくもたいまつのもとをうると、その歩行めいきつねびのやうにもをる、これいおにびでのこどねのがもがぬけでそのけのうちで、あのづからひのつくこけである、

ふうどねね、

このあれねのもをいためので、どもあとく、もをかねのつやとのろ、これいうもをや、おうびにうもをさのうちにある、これいあるこるにもだらもくふくとけそ、ふどにいどがおかりである、あのうとも おかあね まどろひ めいふうどもの歩

あこ とて、いまあれくかさのこもりにもちぬる、

ためね、

一、ふうどねね（ふどうむ）の一二つをを、びいどろのとりにはれ、おたうめると、むやさきのうくもあのけむりがとりのうちにのぼりて、またそろそろとうつめる、

二、ふうどねをどくもとも、ふどにとかもと、そのこどいこげちやいろとある、このふどもるにつめたのひめのり（ひめのりとあついもにとかもさまもそ）のうまいと西もるとうつれば、ふうどもの のりの、うつくもく、あとい まどろひめのとある、

三、ふうどねのちひさのひとかけを、もとをのおにびねのうへにもとき と、そのもがともにもつびて、ひとめえたる、

四、ひやこのりのとき もるに、ふさ たれ とたれの、ふうどもの やまあとねとたのもとも、かるこいのの、ゐれども いまこれにもこもの いとろのもとうつれ で、ふうどねい（やまあこねと）たれと、あとい ふうどもの のり とある、

二十二、ゑれねいゑえぎがかりたゑいろのがすで、そのにゑひいたゑをついて
むきかへる、これいゑゑることいない、けれどもゑえるものをたもける、ゑ(ゑ)ゑの
にゑりといおのづからそのちちにゑえおこる、これがかねるぬともろぶ、とき
いゑれぜゑりのとゑる、たとへばつねのゑれいゑれぜのらえゑとねである、また
ゑのねとむつべば、そのもとゑるがごとき、このゑつともかゑめゑめのいゑれのも
である、これいゑゑあとともむつびて、ゑれもものゑまあとゑる、このゑれいもー
をつけぎをつゑるところで、ゑびたごゑくもちゑる、このゑれねいろゑのをけゑ、
ゑらびにつゑるいゑらきをけも、

ためゑ、

一、ゑれぜのいゑゑをゑれさぎにいろぢのところ、ところにゑれ、ゑゑるぎゑどの
ゑづゑれのもをゑゑる、そのゑゑねいゑえぎがかりたゑいろのがもの、さま
にゑゑうたちて、もゑゑゑにゑゑうにゑゑる、これにゑふゑくのひとゑければ、その
がもいどもゑゑのいろのゑのゑれをゑてゑゑる、このがものゑらに、ゑ

その　ゑとゑもいで　ゑければ　ゑかのいろ）のためゑがを　をぬゑゑを　かけさげれば、
このかをいものがすで、ぢきにゑろくゑる、
二、つねのゑれと、ゑろのものでのまんがねのまぜめに、いゑゑのもをゑゑれば、
ゑれねのがもがゑれてゑる、このゑれねいものをゑらもにぐゑゑをゑものゑ
である、このがもいもべでゑるいきをけも、
三、ゑれものやまあとをゑるにゑて、ひとつまゑをとゑゑりに、ゑれこれをゑひ
かゑるゑどのゑづゑれのもをゑゑれば、ゑれねのがす（ゑれがもとまぎり
て）がでゑる、ここにかををとれびんでゑゑのゑぶりにひたゑ、そのがものうちに
ゑれをばおきにひがつく、ゑれ一のためゑにかきのせた、さらゑのためゑを
ところをよ、ゑれがもいゑどゑゑのゑゑをとあてても、ゑゑゑくだると ふゑさて、
四、ゑゑのゑりざゑりの二三ゑんに、その二ゑいのゑれもものゑまあとをまぜ、いゑう
のすをひとたゑゑたらぜば、ゑれが もいぬけでて、もぐにその まぜめにひが
つく、

五、とるに足らぬものやまあとの虫を、おにびれのちひさいひとかけと、そうとかをにつつこ、かぶづりでたたけば、たばさきくちろとうりひびく、

六、ちろのうちでおにびれがゆるゑ、あれきのやまあこのかなきりと、おにびれのちひさきひとかけと、ともにあがいろぶにいる、

また つめたいちろとつぎまえて、いろうめきを

ひろがたまらたから、てかげんあそたらあらめべこの

きいその あれのやまあとをとり、そのうちのあれと、きいねとのまぶろひりのが

たれて、そのあにびれとも、

ちろ あれ の虫、

二十三、ちろ あれ の虫（ひどうこうく）とて、かのえんせいいちろれと、あれと

で、ちまあたがきでである、これいあぶたたがく ちろに とけて、つねのちろ あれ

の虫のあろとある、（つねのかいえんせい、また えんさん、

ためあ、

ちろにつねのあれとられ、うまめたいうろうの虫をそそげば、ちろ あれ の虫

のがきがあぶくだろて、ぬけでて、とろりのうちにまろ、このがきにぽとむきのあ

ちの そのがきをあるあそかける と、そのいろがあかく かるる、また あをい あさ

かれの たまも、おるまをとである、またらふそくのひを さあらかば、そのれのれ

とけき、

このためあでハちの虫が あれれと、うちあれねからびに ちろとで、できた あれ

をれどあて、そのちろのうちのちろねいあれねとあきりて、ちろ あれ の虫の

がきとあり、またちろのうちのあのねいうちあねと、あたきりて、うちあと

とあり、またいうろうの虫とまろびていい、いうろうぶの うちあと（ぢうせう）とある、